**やっぱりおまけなんかじゃない（！？）所蔵作品展の楽しみ方**　　2011 年 08 月 18 日

さて、前回も所蔵作品展の魅力についてお話したこのコーナー。

今回、「棟方志功 祈りと旅」展と同時開催の所蔵作品展も、やっぱりおまけなんかじゃない（！？）充実のラインナップとなっています。

　見どころの一つは 5 室で行われている特集「フランス美術の流れ」でしょうか。
所 蔵作品と寄託作品によって、印象派、エコール・ド・パリなどフランス美術をご紹介しております。展示されている作家の名前をあげさせていただきますと、モ ネ、ロートレック、モディリアーニ、マティス、デュフィ、ピカソ、シャガール、藤田嗣治などなど･･･。予想以上に豪華な面々と感じた方も、少なくはない のではないでしょうか。

とりわけ当館に寄託されているマルク・シャガールの《オペラ座》（1953 年）は、この機会にぜひご覧頂きたいもの です。舞台が終わっても夢覚めやらない私たちの前へ、白いバレリーナがひらひらと舞い出てきます。シャガール独自の幻想的な幸福感がたっぷりと味わえる本 作品、実物はどうぞ所蔵作品展でご覧ください。

↑左がシャガール《オペラ座》。右はアンドレ・ボーシャン《フィアンセを訪ねて》。

また、所蔵作品についてもっと知りたい方に朗報です！

当館では所蔵作品展について学芸員がお話する「コレクション・トーク」というイベントを定期的に行っています。
9月2日には副田学芸員が「とても不純で矛盾な絵画」と題しましてミロやエルンストなどシュルレアリスムの絵画について語る予定です。

夜6時からのスタートとなりますので、お仕事帰りの方もお気軽にご参加くださいね。

(F.N.)